

# 女子大國文

第百五十八号

平成二十八年一月発行

女子大國文

第百五十八号

平成二十八年一月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百五十八号

平成二十八年一月十五日 印刷  
平成二十八年一月三十一日 発行

〒605-8585 京都市東山区今熊野北日吉町五番地  
編輯兼 発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇七五-五三一九〇七六  
FAX 〇七五-五三一九一二〇  
振替 〇〇〇〇-五三三三四

〒606-8404 京都市上京区上長者町通黒門東入  
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五-四四一四一〇八代  
FAX 〇七五-四三三六二八二

内宴の起源……………滝川 幸 司(一)

——「弘仁の遺美」か「太宗の旧風」か——

丹後地域の「迎講」伝承と、その「祖型」の宗教儀礼……………豊 島 修(二七)

——白山・立山の「白山行事」と奥三河の「花祭」行事について——

彙 報……………(四〇)

京都女子大学国文学会

# 彙報

## 二〇一五年度国文学会行事（後期）

○女子大國文第百五十八号をお届けします。

○秋季公開講座（大学と共催）

十月九日（金）午後二時四十五分より 於J420教室

講題 太宰治の方法

―告白・回想・翻案―

講師 福井県立大学学術教養センター教授 木村小夜先生

\*お詫びと訂正 前号（第百五十七号）百五十三頁彙報欄にて、

本年度の学科副委員長の氏名を誤っております。大國三回生の岡畑有希さんです。また、優秀論文発表会の、白谷絵里子氏の題目に誤りがありました。正しくは「近世文学と民俗―『女殺油地獄』と『女の家』伝承を中心に―」でした。なお、前号に掲載予定であった、大國一回生の栞原陽子さんの能楽鑑賞会観覧記を、原稿を頂いておきながら掲載しておりませんでした。今号に掲載いたします。深くお詫び申し上げます。

○国文学会旅行 学会委員による自主企画

十一月十五日（日）午前八時 阪急嵐山駅東改札口前集合

～午後十四時半解散

行き先…天龍寺、時雨殿、野宮神社

## 【能楽鑑賞会観覧記】

### 生の舞台の魅力を感じて

一回生 柴原陽子

私は今まで能というものを見たことがなかった。能という言葉は知っていたが、他の古典芸能との違いがわからなかった。調べてみると能は歌舞劇の一般名で、ふつう猿楽能を指すことがわかった。歌舞劇とは謡と舞の事である。そして、その能と一緒に演じるのが狂言である。狂言とは日常的な出来事を笑いを通して表現するせりふ劇であるため能狂言とも言われた。能と狂言を総称して能楽という。能楽は笑いの芸能であり、それを見て当時の人々の心はなぐさめられたそうだ。当時の人々が見ておもしろいと感じたものを今の時代を生きる私たちがおもしろいと感じる事は素晴らしい事だと思う。また今回は、能の舞台に立ち、小鼓、太鼓の体験をさせていただくことになった。私は太鼓や笛などの和楽器を演奏する事が趣味であるが今までバチで打つ太鼓しか演奏した事がなく、手で打つスタイルは初めての経験であった。プロの方に教えていただく機会は滅多になく、能が行われる舞台上に立たせていただくことも、とても貴重な事であるので、楽しみにしていた。

そして能楽鑑賞会が始まり、能楽者の田茂井廣道さんから能についての話しがあった。

「京都女子大学に来ました。」

能で言う場面が一番印象に残った。普通に話す声とあまりにも違うので話し始めは驚いた。ただの文でも能で言うのと、とても面白く感じた。

次に着付けがはじまった。モデルとなったのは京都女子大学の卒業生である松井美樹さんであった。能装束は実生活の被服から出発して、しだいに舞台専用の形状と用法を備えるにいったものである。着付けはとても大事な作業で着付けが苦しくて、能楽者が途中で演じる事ができなくなってしまう場合もある。そうなった場合、最悪切腹になる事も昔はあったそうだ。そのため着付ける時は一回一回きつくないか確認する。もし確認しなければ切腹は途中で演じられなくなった者ではなく着付けた者になってしまうからだ。面をつけている時に、着付けをしていた能楽者の一人でもある味方團さんが、

「面は人間がつけて演じた時、光の当たり具合や角度で表情が変化しているように見える。」

とおっしゃった。松井さんは着付けした後、面をつけて演じて下さった。味方さんのおっしゃっていたように面は松井さんがつ

け、演じた事によって表情に変化があるように見えた。私は、能や日本の古典芸能は女性がするイメージはなかったが、今回の松井さんの男性にまさる力強さと迫力にはとても引きつけられた。

次に小鼓、太鼓体験があった。私は太鼓のほうを体験させていた。舞台にあがる時はとても緊張した。私が今まで叩いてきた太鼓は太鼓のサイズが大きいほど低くて重い音が出た。しかしこの小鼓と太鼓では大きい太鼓のほうが高い音が出る。また太鼓の方がおっしゃっていたのだが、この太鼓は日本一叩くと痛い太鼓らしい。おっしゃっていた通り、数回叩いただけでとても手が痛かった。そして高い音を私は中々出すことができなかつた。それでも何回も丁寧に太鼓の方が教えて下さったおかげで高い音が出るようになった。この体験コーナーが終わる頃、太鼓の方が、

「声を出して叩いてみようか。」

とおっしゃった。まず先にお手本を見せて下さったが、低くよく通るかけ声に太鼓の高く澄んだ音が響いてとても素晴らしいかった。次は私の番になった。大きな声を出すのは少し恥ずかしかったがせっかくの機会なので思いきりやってみた。叩き終えるのと皆さんの人が笑ってくれた。大学の先生や能楽者の方の前でとても緊張したが自分のした事で人が笑ってくれるのは気持ちが良い

かった。能楽者の方たちもこうして昔から自分より身分の高い人の前で演じた皆さんの人を笑わせてきたと思うと、とても貴重な体験をさせていただいたと思った。

次に狂言と能を見た。私はここでやっと二つの違いを理解することができた。狂言は謡を謡わせようとする主と、どうにかしてそれを避けようとする太郎冠者のやり取りがとても面白かった。狂言はとてもゆつくりとした口調である。顔の動きもとてもゆつくりだが体の動きも大げさなのでとてもわかりやすかった。私は太郎冠者がお酒を飲む時の、のどの音がよく聞こえ、おいしそうに飲んでるように見え、とてものがかわいた。能は名前だけではよく聞く橋弁慶であった。牛若丸を演じていた能楽者の方は私より小さかったが、それを感じさせないほどの力強い声と足音、そして迫力があった。そして弁慶が登場してきた瞬間、会場の空気が変わった。私は思わずはっとした。それくらい弁慶は見た目、雰囲気、すべてにおいて恐ろしく見えた。衣装もとても大きいので、それだけで威圧感があったが、演者の顔の表情、足音、声により恐ろしさが増し、この世の者とは思えなかった。今までホラー映画など怖いと言われるようなものも沢山見てきたが直接目で見て、これほど怖いと感じた人はいない。私は弁慶に殺されるはずがないが、逃げたくなくなるくらい弁慶は殺気立っているよう

に見えた。牛若丸との斬り合いは目が離せなかった。私は初めて見た能にとても大きな衝撃をうけた。

今回の新人生歓迎行事は、とても印象に残るものばかりであった。日本の古典芸能は生で見る機会は自分で行動しなければとても少ない。能や狂言の良さは生で見る事により、わかるものだと思う。私は日本の古典芸能と深く関わりがある京都に住んでいる。これからは、またこのような古典芸能を見る機会があれば進んで参加し、生の舞台の魅力を体験していきたい。

### 【秋季公開講座聴講記】（十月九日）

#### 太宰治の方法に触れる ― 翻案作品を通して ―

大國 二 回 生 廣 中 智 美

今回の公開講座では、太宰治の作品からうかがえる人間の言葉の特質について、翻案作品を通して存分に味わうことができました。従来、太宰の作品では「道化の華」や「人間失格」などに見られる、登場人物に自身を投影した形式が広く知られています。しかし、翻案作品もまた、実生活を通して人間そのものを見つめ続けた、太宰独自の方法が見受けられました。

西鶴作品の翻案である「貧の意地」は、宴席で一両が紛失するものの、主人公・原田が相手を尊重しながら自己保身すること、損得が生じることなく穩便に収束します。本文中で原田は、失墜する善意に狼狽しつつも、見つかった一両で得をしたと思われたくないという一心で、何とかして自尊心を保とうとするのですが、口から出る言葉は内心とは裏腹に、表面的に自尊心を倒錯していきます。ここに表れている矛盾が、言葉が行動とイコールの関係を結ばず、実体とは別の状況を創り出していくという特徴を、見事に表現していると思いました。この他に太宰は、告白という方法から「駆込み訴へ」という翻案を残しています。「駆込み訴へ」では、ユダが主人イエスを裏切るという行為によって対等性を回復しながらも、「旦那さま」という呼びかけで対等性を放棄しており、再び現れる矛盾の中にユーモアを見出しました。また、ユダ自身は金目当てではないという本心を主張しながらも、直後に自身が振り回されていた事実を否定します。そして結局はイエスを利用し、物を買う立場になることで、「金目当て」という聖書とおりの規範に引き戻されるのです。ここで、従来の規範から逃れて自由であろうとする指向が、結果として言動による自己喪失を招いている点において、人間の心と言動の不合理性を改めて考えさせられました。また、ユダとイエスの構図を回想形式

で踏襲した「右大臣実朝」では、主人実朝と仕え人の公暁のやりとりを、近習が回想していきます。ユダがイエスを裏切るように、公暁が実朝を暗殺するので、一見すると、回想する近習は第三者に過ぎないと捉えがちです。しかし、「アカルサ」と「ホロビ」を同質と見た実朝を、公暁が暗殺することで「ホロビ」としての「アカルサ」の体現者たらしめたと考えると、それを語り続ける近習も其犯関係を結んでいる、という解釈は新鮮で納得させられるものでした。言い換えれば、語り手と裏切り者の性質を持つユダの姿は、それぞれ近習と公暁に投影されているということだからです。同時に、回想と告白は形式が異なるだけで、どちらも語りを相対化する手段に変わりはない、という事実に変更して気付かされました。

このように太宰は、言葉が内包する可能性と人間の多層性に注目し、翻案・告白・回想を通して両者を具現化しました。確かに人間は、その場の状況や心理に翻弄されやすい生き物です。太宰はこうした人間の本質を見抜きながら、原典の台詞に人間的な内面を加えて翻案したのではないのでしょうか。普段から言葉の性質を重んじ、殊に人の心に敏感であった彼だからこそ、このような翻案を生み出すことができたのだと思います。

## 秋季公開講座に参加して

大國二回生 矢島 佑果

恥ずかしながら、私は国文学科に所属しているにもかかわらず、ともに太宰治の作品を読んだことがなかった。太宰の作品として読んだ記憶があるのは、中学校の国語の教科書に教材として載っていた「走れメロス」だけである。教科書の教材を堂々と読んだと言いつ張るのもおかしな話だが。

そんな時に、今回の公開講座が太宰治をテーマにして行われると知った。せっかくの機会であるのに、さすがに太宰を読んだことがないまま講演を聞くのはまずいと思い、慌てて図書館に行き、講演までの短い日数で読めるものを探した。手に取ったのは『お伽草紙』だった。公開講座の前日に読み終え、太宰治は独特な語り方をする人だなと感じた。まるで一般人とは違う目で世の中を見ているような印象を持った。

今回の公開講座は、木村小夜先生にご講演いただいた。やわらかい印象の先生で、太宰研究の第一人者でいらつしやる先生のお話が聞ける本当に良い機会だった。テーマを「太宰治の方法」とし、先生が研究されている太宰の小説の書き方を今回は翻案を中心にお話いただいた。翻案とは、「前人の行った事柄の大筋を

まね、細かい点を変えて作り直すこと」（広辞苑第六版より）である。太宰は翻案をよく行っており、私が読んだ『お伽草紙』もその一つの例であると知った。

今回取り上げられた作品の中に、「貧の意地」というものがあった。井原西鶴の「大晦日は合わぬ算用」を原典としている作品である。主人の足りない一両を巡って起こる騒動を人の優しさでもって収めるという話なのだが、太宰が翻案すると、人らしさが強調されて語られる。先生には、原典と太宰の小説との相違点を挙げて説明をしていただいた。原典では、誰が足りない小判を自分の懐から出したのか、誰が小判を見つけたのか、主語が書かれていないため分からないが、太宰は、小判を見つけたのは小判を失った主人であり、さらに小判があることを「そこにあるよ。」と皆に知らせている。主語をつけることで、主人である原田が発見者であり、小判を出したのも主人ではないかと想像できるように書かれている。さらに、足りない小判が見つかり、差し出された一両が余ってしまったときの行動も異なる。太宰が書いたものは、主人が小判を出した可能性があり、余分の一両も彼のものである。しかし、彼はそれを自分のものではないと言い張る。その台詞も異常に長い。人が長い長い言葉を発する時はどんな時なのか、何を伝えたくて人は自分の言葉を長く発してしまうのか。太

宰は生々しい人の言葉の使い方、人の行動をきちんと書く作家であると教えていただいた。講演のはじめに、「太宰治は小説でなければできない言葉の使い方をする」とおっしゃっていた理由が少し分かった気がした。

今回太宰の小説に部分的だが触れたことで、自分の知らない小説の魅力に触れることができた。太宰の小説は太宰にしかならないのだろうなと思っただけ、熱狂的なファンが多いのも納得ができた。太宰治という人物と、その小説に興味を持つことができた貴重な講演が聴けたことを嬉しく思う。

#### 木村小夜先生にご講演を拝聴して

大國四回生 杉本志帆

まずこのスペースを借りて、お礼を申し上げる機会をいただけたことに感謝いたします。ありがとうございます。

私が木村先生のお名前を拝見したのは、今回のご講演が初めてではありません。三回生のゼミにおいて、太宰治の「雌に就いて」を研究し発表したことがあります。その際に先生の論文を参考にさせていただいたことがあります。そのような経緯もあり、秋の公開講座のラインナップが発表されてポスターを見た瞬間から、これは参加しなくてはと心に決めていました。

「告白・回想・翻案」という三つの方法を大きなテーマとして取り上げ、言葉の矛盾性や語り手の時間軸について述べられています。そこから太宰治が、言葉というものがその通りに存在する難しさを知っている人間だと分かりました。小説における書き換えは太宰の巧い書き方でもあり、読者への挑戦でもあるのです。太宰が「生々しい人間の言葉遣い」を描いていることがありありと分かり、「そうだったのか」とはつとさせられます。作中の登場人物の言葉（台詞）だけでは分からない、地の文（登場人物の態度や心中）などで読者には分かることがこんなにも多くあったのかと驚きました。典拠になったものとの差異により、太宰の表したいものが分かってくるのです。表面上では分からない、登場人物の深層心理が反映された文章は、現代で更に尚広く求められてゆきそうだと感じました。

先行研究が多いと、もうすべての研究がやり尽くされているのではないかと思ってしまうことがよくあります。特に太宰治などは研究者が多いイメージがつきまといます。しかし今回のご講演で、まだまだ考えるべきことは沢山あると思ひ直しました。論文があまり書かれていない作品を見直すというような新境地を切り開く以外にも、先行研究を再考察していく必要性を認識しました。正解のない文学の世界は常に、良い意味で、批判的であるべきで

す。先行する研究は、一時の前提でしかなく、絶対ではありません。その気概は私自身の研究にもとても参考になると感じました。卒業論文へも活かしていきたいです。

ご講演を拝聴し全体を通して、「気付き」へのプロセスがよく分かるお話であったと感じます。木村先生はきっと「気付く」のが、お上手なのだと思ひました。従来の研究で言われているところを再検討なさり、物語の状況の細部や人間関係には看過できない差異が存在することを発見されました。そこに気付くことが出来るか、出来ないかは研究者としての大きな素質だと思います。「気付く」というのは、一種の才能であり、伸ばすことのできる才能です。先生は考えること、自分で気付くことが巧みな方であると感じました。気付きの能力を向上させるには、努力するしかありません。私などが言うのもおこがましいことですが、先生の才覚には日々の努力が滲み出ています。先生の今後の更なるご活躍が楽しみでなりません。

最後になりましたが、木村先生ご講演本当にありがとうございました。乱筆乱文にて見苦しいことは存じますが、どうかお許しください。またお話を聞かせていただける日を楽しみにしております。

## 【国文学会旅行の記】（十一月十五日）

### 京都の秋を感じて

一回生 加藤 怜 奈

四月に学会委員になった私達一回生一組の仕事は学会旅行の計画でした。入学した直後ということもあり国文学会のことや学会旅行のことは何も分からなかったのもとても不安でした。このように何も分からない状態で始まったのが今回の学会旅行の計画でした。

旅行の計画は、行き先の決定から始まりました。いくつかの候補地を挙げ、先生方と相談させていただいた結果、行き先は嵐山に決定しました。これは、文学にゆかりのある場所へ行くということがテーマの学会旅行にふさわしい場所であり、秋の旅行であるため参加する皆さんに京都の秋を感じていただきたいという理由から嵐山に決定したのです。

行き先が決定した後は下見に行ったり、先生方との打ち合わせを重ねてきました。そのうちに旅行の計画がだんだんと出来上がっていく様子を実感してとてもわくわくした気持ちになりました。

嵐山で見学する場所を決めた後はチラシとパンフレットを作成

しました。パンフレットは参加してくださった方に分かりやすいように、チラシは参加したいと思っていただけのように一生懸命に作成しました。そのかきもあってかパンフレットが完成して先生方に確認していただいた時にすばらしいパンフレットができたと言っていたことができただけだったので本当に嬉しかったです。また、先生方にチラシを配っていただいた後は参加してくださる方が本当にいるのかとても不安になりました。しかし、十名以上の方々が応募してくださったので自分達が計画した旅行に行きたいと思ってくれたということがとても嬉しくなりました。

学会旅行当日には集合時間がいかに早くもかわらず時間通りに集合していただきました。また、天龍寺の庭園や時雨殿、竹林の小径を散策しているときに参加された方々が綺麗やすごいといってくださいたときは旅行の計画の仕事を選んで本当に良かったと思いました。時雨殿では平安装束の体験が行われていました。旅行前には参加された全員に体験していただけないかもしれないということになっていたのですが、全員が平安装束の体験をすることができ、とても喜んでいただけたので本当に良かったです。私も秋の京都は初めてで、綺麗な紅葉を見ることができ、さらに平安装束の体験や貴重な資料を見せていただくなど、普段できない体験をすることができました。とても楽しかったです。

今回の学会旅行では大きな事故や怪我もなく、皆さんに安全に楽しく旅行していただけたのでとても良い旅行になりました。また、行き先を嵐山に決めて、文学を感じていただき、さらに京都の秋も感じていただきたいということも達成できたのでよかったです。

最後に旅行の当日までたくさんのアドバイスをくださったたり、私達の我が俵を聞いてくださった宮崎先生、山崎先生、江富先生に感謝を申し上げます。有難うございました。

## 『女子大國文』 投稿規定

### 一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

### 二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

### 三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

### 四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

### 五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

#### 六、(投稿先)

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

#### 七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

#### 八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

#### 九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、

採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

#### 十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

#### 十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

#### 附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

## 編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

坂本信道・中前正志

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を報告、審議の結果、二点が掲載となりました。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(坂本・滝川)